

Daisaburo Hashizume

橋爪大三郎にきく

東京工業大学教授。一九四八年十月二十一日生まれ。東京大学文学部社会学科卒業後、同大学院社会学研究科社会学専攻博士課程修了。氏は学生時代から、構造主義を踏まえ「言語派社会学」の樹立を目指して執筆を続け、性、言語、権力の三つを説明原理とする「記号空間論」の構想を展開した。著書に「言語ゲームと社会理論・ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン」「民主主義は最高の政治制度である」など多数あり、新聞、テレビでも活躍中である。

学者である前に一人の人間としての形を作ったであろう、若き日の話を伺いに期待と緊張の入り交じった思いで、九月十七日、午後一時に東工大にある橋爪氏の研究室に赴いた。氏は、「忙しいからおっしゃりながらも二時間にわたって話をしてくださった。

高校時代 社会学への目覚め

——いつごろどのようなきっかけで社会学をやるうと決意したのですか？

高校生のときに、理系に進もうか文系に進もうか迷った

——高校はどちらですか？

開成高校です。といってもそのころは都立日比谷に落ちた人が受けるころでしたから、たいしたことはないんですが。

そのころ私は、自分のことを他人のように外側から見てみたいと思っていた。ほら、高校生ぐらいになると本が読めるようになるから知識が広がるでしょう。だけど実体験としては学校と家と、せいぜい盛り場と、三角形で往復するぐらいしかからちつとも広がらない。そうすると体験を通さないで、情報として、あるいは知識として知っていることは多いけれども、実際にそれを考えていく上での手がかりとなる体験や基盤がないから頭でっかちになってしまふんです。どう頭でっかちになるかは人によりますけれどね。理系人間になったり、オタク人間になったり。

私の場合は自意識過剰になるタイプで、自分のことが気になるわけです。けれど自意識というのは、ちつとも広がっていかない。自分のことを考えても、自分のことを考えている自分が意識されるだけです。だから別の何かが必要なのです。その点社会学は、一人ひとりの違いを相対的に無視して、全体としてどういう現象が起こるのかを見る学問ですから、高校のときに多少自意識過剰だった私としてはちょうどいいと思った。自意識過剰といっても文学と

は

んです。ちょうど父親が定年になったので早めに就職したほうがいいのかもしれないなあ、とも思いましたね。当時は高度経済成長の真っ最中でしたから草木も理系になびいていたわけです。それで、少しはそういう本も読んでみたのだけれど、いま一つ自分に向いていないように思われた。特に理系が嫌いだったのではないのだけれど、好きでもなかった。同級生の中には好きで好きでしようがないやつもいてそういう連中の好きさかげんをみていると、これは彼らに任せておいたほうがいいんじゃないのかなと思っただんです。

そのころ私は社会科が好きだったし、できたから、そっちのほうに向いているなという気がして、ほんとに向いているかどうか確かめてみたんです。確かめるというのは、図書館に行って片っ端から本を読んでみた。……開架式の図書館だったんですけれども、ずうつとみていくと社会学というのがあった。そのころ私は社会学なるものがあるとは知りませんでしたから、ああこんな学問もあるのか、と思いました。その隣に社会心理学というのがあって、その隣には心理学っていうのがあって……というふうに、本棚をずうつと順々に片っ端から見ていったんです。それで、社会学のところを見たら、まあまあおもしろかったのと、これなら自分にもできそうだという気がしたんですね。

かやっているような、自意識ばかりで、社会のことなどどうでもいいていうような連中とは距離をおいていました。とはいえ、政治や経済に熱中しているような人からすればずっと文学に近かったのでしょうか。そういうわけで社会学をやるうと決めましたね。

駒場時代 全共闘との出会い

I 勉学

——一九六七年に東京大学に入学されたわけですが、駒場時代にはよく勉強なさったんですか。

一応社会学をやるうと思って大学に入ったわけですが、入ってみたら社会学科は本郷にあるわけですから、駒場の社会学はあんまりおもしろくなかった。

それでも、初めの半年ぐらいは真面目にやりました。高校のときみたいに決まった時間に教室に行って、授業を受けて、きちんとノートをとったり単語帳を作ったりしてました。それプラスいろいろなことをするのが大学だと思っただけから。予習復習をして、先生の間違いを見つけたりもしました。それは無理数論の、デデキントの切断の定義で、非常に重要なところだったから、誰か指摘しないといけないわけですよ。でも、誰も指摘しないから、どうやらみんなおとなしく聞いてノートとってるだけで、中

橋爪大三郎にきく

は

身はどうでもいいと思っっているんだなあ、と気づきはじめてたんですね。試験にしても、ばっちり計算や式の展開などの準備をして臨んだのに、「今回の講義の感想を述べよ」という問題一問だけだったりして、何と学生を甘くみているのかとすっかり頭にきてしまっただけ。

それに、私たち学生が関心を持っていたことと、授業の内容とがほとんど何の関係もなかった。この授業を受けていたらいずれは学生が切実に関心を持っていることにながってくるんだぞ、という予感さえもしなかった。

授業に出ているにもかかわらず単位が取れると分かったので、一年生の後半からは授業に出るのをやめてしまいました。そのあとストライキになって今度は授業のほうがなくなってしまうから、結局四年間合計して一年ちよつとしか教室に出ていないんじゃないのかなあ。

授業には出ていなかったけれども、本は読んでましたね。本読んでない他の人と話が合いませんから。クラスに入ると後ろの黒板に「読書会やります」というようなのがべたべた貼ってあるんで、それに参加したりもしていました。だいたいマルクス主義系統の読書会が多かったのですが、フーコー（*注1）とか、アルチュセール（*注2）っていうのがあると聞けば、そういうのをかじってみたりする。友だちに、サルトルに詳しいのがあるれば、サルトルを読み……、民青の人はレーニンに詳しいですからそういうのを

——その演劇についてももう少し詳しく教えてもらえますか？

当時、駒場劇場というのがあったんです。それは、由緒と伝統のある劇団だったんですけども、二年くらい上で留年した人が「前衛劇団に作りかえる」とか言って先輩を追い出して前衛劇団に衣替えしてしまっただけ。私は、由緒ある劇団の最後の公演を見に行っただけ、これはいいなと思って訪ねていったら、もうまるで違った劇団に変わっていた。もう一つ演劇研究会というのも見に行っただけですが、なんか暗くて左翼系の劇団だった。そんなところにいられますます自意識過剰に凝り固まる、これではどうしようもないな、と思ってそちらはやめときました。

III 全共闘

橋爪氏が教養学部（駒場）時代を過ごした一九六七、六八年というのは、ちょうど学生運動が盛り上がりつつあった頃である。東京大学においても本郷の医学部のストライキを皮切りとして「東大全共闘」の結成、安田講堂の占拠、機動隊の導入、安田講堂の陥落、そして東京大学入試中止、という一連の事件への幕開けの頃でもあった。

1 演劇から全共闘へ

読んでる連中もいる、というふうにならなるとみんな読んでいきましたね。

II 演劇

——授業に出なくなって、何をしたらしたんですか？

東大の入学試験が済んだあといろいろ考えましてね。私は中学三年のときから大学に合格する今まで、ずっと勉強ばかりしてきた。受験勉強をやり過ぎて自分の時間が持てなかった。で、どうすればいいかなあと考えて、今までと反対のことをやろうと思ったんです。それで、芝居とか演劇は多分受験勉強とは反対のことだろうと考えて、そういうのをやろう、と。

そこで、当時駒場にあった数少ない劇団のひとつに接触しましてね。秋に芝居をやるといってそれで入れてもらった。その劇団の人に「稽古は何時から何時までなんですか？」って聞いたら「午後六時から終電までやる」とか言うし、「公演のときに授業が重なったらどうするのですか？」って聞いたら「当然、授業には出ないのである」とか言うから、ああ、そういうものなのかと思いついてね。公演に向けて忙しくなったこともあって、授業は体育以外はほとんど出なくなったわけなんです。

——実際に、デモやストライキにはどれくらい参加したのですか？

ちょうど周りで全共闘運動が盛んになっていた頃に、私は演劇もやっていたわけだ。演劇と運動の両立は大変だった。それでも芝居の稽古を続けて一年生の後半から二年生の六月ごろにかけて、二回ほど舞台に立ったりしていた。その後二年の六月に機動隊が入ってストライキになってからは、そっちの方に力点を移動させました。

私は芸術系ということで政治青年ではなかったのですが、クラスの皆は勝手なことをやってましたね。革マルのセクトに出入りしてるやつとか、共産党系の組織に入っているやつとか、そういう活動家やシンパの連中がいろいろなことをやっていた。例えば、一年生の終わりの一月ごろに、佐世保にエンタープライズっていう航空母艦（*注3）が寄港することになった。それに反対するために各クラスから一人ずつ佐世保に送り込むということになって、一人千円ずつカンパを集めたりしてた。そのあと三月には王子野戦病院（*注4）に、かけつけたらどうか。そういうのに出かけないと、アンガージュ……参加してないってことで落ちこぼれちゃうわけですよ。皆一生懸命やっているからね。私は、芝居が忙しくて全然行かなかったんだけど。それに、つまらなかつたし。というのは、そういう運

動は完全にセクトに仕切られてしまっているから、彼等の言うとおりに行動しなくてはならなくて、学生の主体性なんてものは全くなかったわけです。だから、私のクラスでは自分たちで行動しようってことを決議していたらしくって、どこかからヘルメットを買ってきて、クラスカラーに塗って、「今後は独自行動をする」とかなんとか宣言したりしてましたね。私は、舞台上に立ったりしてたから参加してなかったのだけれど、二年生だった年の六月十七日の未明に、安田講堂に機動隊が入ったことがきっかけになって、そのころから徐々にそっちの方に力点を動かしました。なぜこんなことで大騒ぎするか皆さんにはよく分からないと思うんだけど、大学側はそれまでずっと「私たちは、警察とは何の関係もありません。学問の自由を守るために、学生たちが左翼活動に参加するのに反対しているのだから……」ということを言い続けていたわけです。それなのに機動隊を入れるなんて何事だ、ということでも学生がだいぶ怒りましてね。翌日学校に行ったら、分厚いガリ版刷りのパンフレットを渡されまして闘争の歴史、なんてことを勉強していくわけですけども、事実経過が読むだけにおかしいわけですね。それで当時の自治会長が、観光バスを四十台くらい借りてきて、皆でそれに乗って本郷に行きまして、機動隊導入抗議集会に参加したりしましたね。

先生自身も、そういう大学側の対応に対して怒っていた……？

そりゃあ、大学側はけしからん、と思ってました。こういう馬鹿馬鹿しいことを見過ごしては……そりゃあないんじゃないのっていうのはありましたからね。基本的には怒っていた。でも、普通の……人間関係での怒りっていうのはワァーッと湧いてそのあとなくなるものだけれど、こういう怒りっていうのは、持続しないといけないわけですから、それを怒りと呼んでいいのかどうかはまた難しいけどね。

2 二十歳の誕生日

二十歳の誕生日にはどのようにして過ごされましたか？

私の誕生日は十月二十一日なのですが、二十歳のときはちょうど国際反戦デーの当日だった。昔は新宿駅を貨物線が通っていて、ベトナム戦争に使うジェット燃料やなんかを運ぶ貨物列車がずうっと通っていたわけですね。で、当然新宿ターミナルを通るから、それを阻止してベトナムの人民と連帯しようということを過激派が言うわけだ。それは全共闘とは直接関係無かったのだけれども、そういうも

こう側の防衛線があったから、そのあたりで追いかけてごっこなんかやっているという状態でしたね。

4 角材とヘルメット

運動のときに学生たちが持っている角材やヘルメットはどうやって集めるのですか？

ヘルメットは、各クラスで買いました。自分の家にもって帰ることもありましたが、友だちの家に置いておくこともありました。それから角材は場所をとりますから、幌をかけた二トントラックにたくさん積んであって、それがバツと現場に着くようになっていた。それを駒場とか本郷のどこかに隠しておいて、持ってくる。角材といっても三・六メートルの杉の棒を真ん中で少し角度をつけて半分の長さに切るだけですからね。タオルと軍手は自弁でした。

家にヘルメットを持って帰ったときに、ご両親は何か言いませんでしたか？

いや、ちょうど父親が病気で入院してましたし、母親は何も言わなかった。それでも一度「おまえはそういうことをしていいと思ってるのか」って聞かれたので「いいと思ってる」って答えたらそれ以上は何も言いませんでした。

3 安田講堂陥落
一九六九年の一月十八日、十九日の安田講堂陥落のときにはどうしてましたか？

そのときにはお茶の水にいました。本郷キャンパスは完全にロックアウト状態で近づけなかった。近づけないけど、何かしなくてはいけないということで、当時お茶の水にあった中央大学の広い中庭に集まって、そこから御茶ノ水駅のほうに繰り出して……、そのちょっと先のあたりに、向

——全共闘の運動を通して一番印象に残っているのはどんなことですか？

確か誕生日の一、二週間前じゃなかったかと思うんだけど……。そのときも、国際反戦デーのときと同じように、集まって新宿方面に行こうということになったんです。でも、阻止線があったりしていろいろと回り道をしているうちに、普通の市街地で乱戦になってしまったんですね。そしたら、よその大学の初めてデモに参加しましたっていう女の子がいて、白いヘルメットに赤い十字を書いて救護隊というのを勝手にこしらえてね。自分は救護隊だから中立だ、みたいなつもりじゃなかったんだけど、機動隊はそんなこと全く頓着しないから、追いかけて捕まっちゃってねえ。男女の見分けもつかないから、ぼこぼこに殴られて頭からかなり血を流したりしたので、その子を助けて医者に連れていったことがありましたね。

闘争の終了 社会学者への道

I 敗北

——全共闘運動から離れたのはどういうきっかけからですか？

わけですから、なぜ駄目なのかということとをそれとは別に考えていかなくはならなかった。

——学生時代に、非常に多くの時間をかけた運動が負けちゃったのだと分かったときにはどんな気持ちでしたか？

そりゃあ、あんまり愉快なものじゃなかったですよ。私自身は、この運動の課題というのは左翼が成り立つかマルクス主義は成り立つのか、というところにあると思っただけです。それで、最初はマルクス主義は成り立つけれども、運動としては負けたんだというふうに思っていました。しかし、だんだんとマルクス主義に対するさまざまな疑問が浮かんで……。マルクス主義は資本主義経済に対して否定的だけれど実態としての経済は資本主義だ、とかね。いろいろ考えていったんだけど、最終的に解決したのは森嶋通夫さんという経済学者の書いた『マルクスの経済学』という本を読んだときです。この本を読んで、マルクス主義は理論的にも限界のある主張だということとを根本から納得できたんですね。でも、それを読んだのは七五、六年で、二十七歳くらいのときだった。二十歳の頃の私は、やっぱり一応マルクス主義者だったわけですから、セクトには入っていなかったけれどもマルクス主義は正しいと思っていたんです。その立場からいろいろと行動して

そりゃあ、全共闘がなくなっちゃったから。主体的に、この運動は間違っているからやめようというのではなくて、なくなっちゃったからやめたという……そういう意味では受動的だといえるかもしれない。でも、やめるといってもきれいさっぱり運動から離れてしまうことはできなかった。というのは、一連の運動の中で捕まっちゃって小菅の拘留所なんかにいる学生がいるわけでしょう。彼等のことはほっとけないから、弁護士費用を稼ぐために街頭でカンパをしたりしなくてはならない。裁判はずっと続きますからね。

——じゃあ、間接的な形でその後もずっと関わっていたのですか？

まあ、それは義務みたいなものだから。私の友だちなんかも捕まっちゃって、執行猶予はついたらけれども有罪でしたから就職できないし。捕まるか捕まらないかはそれこそくじ引きみたいなもので、私はたまたま捕まらなかっただけですからね。そういう連中をほっといて自分だけ抜けるっていうのは、そりゃあまずいんじゃないかなあ、という思いはありました。友情というか、義務ですかね。でも、義務じゃ運動はできないわけですよ。運動はもう駄目な

いたわけですけれども、どうもなかなか現実と合わなくて、だんだん懐疑を覚えていって、最終的にはマルクスの理論は間違っていると考えていった……というあたりは精神的にも苦しかったですよね。

II 社会学への道

——全共闘の敗北を知って、社会学者になろうと思われたのですか？

というか……。全共闘はもう終わりになってしまっただけで、政治をやるわけにもいかないし、お芝居だっただけでプロになるわけではないからね。そういうときに自分が飽きずに続けられないのになって思った。それには大学院に行くのが一番自分を鍛えられるし環境も整っているし、というふうに考えて進学しました。

III 運動を振り返って

——全共闘運動を通して得たものはありますか？

得たもの……。まああえて得たものと言うならば、社会学者として非常に良い実験ができたということでしょうか。人間がふだんとは違う環境に置かれたときにどうい

行動をとるか、社会学にとって非常に重要なことなので、それはひとつの成果だといえるでしょう。

—今の先生の考え方などに与えている影響はありますか？

運動が終わってみて私が一番思ったのは、大学の研究職とか研究というものは公的資源、公的財産だということだったんです。だからすべての人に開かれていなくてはならず、そこには正義もあるはずなんだけれども、全共闘という視点から見ると、そういうものはあんまり無いみたいだった。でも、だからといって私は大学と関係を持たないよ、というふうに言えばそれで済むかというところがではない。少なくとも当時は、そのポストを占めるべきではない人がそれが占めているのではないか、というふうに思ったんです。いまは、当時と立場が変わって、こうして大学の教員をやっているわけです。そうすると学生から見れば教員のあら、というかいんちきなところばかりよく見えるかもしれないけれども、教員からすれば必ずしも学生が正しいというわけではなくて、批判すべき点もいろいろあるだろうし……ということがだんだん分かっています。だから私自身の気持ちは学生と教員の間にある。生徒は生徒、教員は教員というふうに分かれているけれども

大学で追求されている、大学でやらなければならぬ本質的な課題はあるわけですから、私は大学がなくていいとは思っていない。むしろ、そういう本質的な課題については率直でありたいな、というふうに思っています。

二十歳へのメッセージ

学生時代に、もっと議論をしてほしい。とは言っても、昔とは大学のあり方も変わってしまいましたから難しいとは思いますが。

学内寮がなくなつて、自宅通学なり、アパート通学なりが増えて学生間のコミュニケーションがなくなつてしまつたし、寮に泊まり込んで夜を徹して話し合つたりもできなくなりましたからね。でも、議論をしていないということとはデメリットなんでもではなくて、もうどうしようもないわけです。磨いていないダイヤモンドと同じです。磨いてなければダイヤモンドでもガラスでも一緒なんです。

まずは時々マスメディアではないメディアから情報を手に入れて、自分の頭で考えてみて、そしてその結果をぶつけられる相手をさがす。そういう志を持っている人は必ずいるはずですよ。自分が一人である間に仕込みをしておかないと、そういう人に会つても分かりません。一人ぼっちでいるということ、個であるということはあんまり関係がない。長い時間一人であるだけでは、個なんて全然持てま

せん。自分を鍛えていくためには、手近な人間とぶつかるということがどうしても必要なですよ。

*1 フーコー(一九二六〜八四) フランスの哲学者。主著に『知の考古学』など。

*2 アルチュセール(一九一八〜九〇) フランスの哲学者。主著に『マルクスのために』など。

*3 エンタープライズ 世界最大の原子力空母(一九六八年当時)。北ベトナム攻撃の途中で佐世保に寄港した。野党・労働団体・学生は一斉に反発し、佐世保に乗り込んで抗議集会やデモを繰り返した。

*4 王子野戦病院 東京の米軍王子キャンプに、一九六八年三月開設された米陸軍の野戦病院。

取材日・場所 一九九六年九月十七日・東京工業大学橋爪研究室にて

【取材・執筆者】

岸本渉 佐藤治彦 佐藤陽子 田辺昌紀 *中沢佳子
長谷川一郎 若原拓哉